

# パパラッチ

2006(平成18)年4月8日鑑賞(ユウラク座)



監督＝ポール・アバスカル／プロデューサー＝メル・ギブソン／出演＝コール・ハウザー／ロビン・タニー／デニス・ファリーナ／トム・サイズモア／ダニエル・ポールドウィン／トム・ホランダー／ケヴィン・ゲイジ／ブレイク・ブライアン（日活配給／2004年アメリカ映画／84分）

…… 1997年のダイアナ妃の交通事故を契機として、一躍世間に名を挙げた(?) のがパパラッチ。「フライデー」と言われている日本とはケタ違い(?) のその横暴ぶりは、まさに目が点に……? この映画はそんな極悪パパラッチに対する、若きハリウッドスターの捨て身の反撃をスリリングに描くもの。「まさかここまで……」と思いつつ、スクリーン上で展開されるハリウッドスター VS パパラッチとの「仁義なき闘い」と、新たに登場するベテラン刑事 VS ハリウッドスターとの知恵比べは実にスリリング。しかして、その結末は? それは絶対内緒……。

## パパラッチとは?

「パパラッチ」という言葉が日本で一躍有名になり定着したのは、1997年に起きたイギリスのダイアナ妃の事故死によって。

パンフレットによれば、「パパラッチ」とは、イタリア語でフリーのカメラマンを指す「パパラツォ」の複数形とのこと。そして、その語源はフェデリコ・フェリーニ監督の『甘い生活』(60年)に出てくるカメラマンの名前とのこと。

ダイアナ妃の事故死は、彼女を乗せた車がトンネル内でパパラッチの車に追跡されていたことがその一因だったため、3人のフランス人カメラマンが逮捕されたが、その後無罪・釈放になっている。その他この映画のパンフレットを読めば、多くのハリウッドスターたちがパパラッチの「被害」にあって悩まされているこ

とが紹介されている。ハリウッドスターも大変だね……。

## ストーカラッチとは？

さらにパンフレットには、「パパラッチの数は総勢200名にのぼると言われており、中には怒ったリアクションを撮るため（そういう写真の方が高く売れる）、家族を中傷したり、挑発行為に及ぶ者もいる。スターにしつこくつきまとい、あるいは待ち伏せするパパラッチを指して、最近では『ストーカラッチ』という言葉も使われるようになった」と紹介されている。これってホント？ と思っていると、この映画では、まさにこの説明どおりのストーカラッチの「生態」が赤裸々に……。彼らの狙いはハリウッドスター本人は勿論だが、その家族や妻たちのスキャンダル。なぜなら、興味本位のタブロイド紙はそんなネタの方がよく売れるから。したがって彼らは、スターたちのプライバシーなど無関係に、子供や妻の姿も撮り放題……。

そのうえ、これに抗議しようとする、あえて挑発のうえ、手を出したところをパチリ……。さらにダイアナ妃のときもこうだったのかと思えるほど、スターの車を取り囲んでの乱暴狼藉の数々……。こりゃまさにストーカラッチ……。

## パパラッチのターゲットは？

パパラッチ界のカリスマ（？）、レックス・ハーパー（トム・サイズモア）やその仲間のウェンデル・ストークス（ダニエル・ボールドウィン）たちのターゲットとされた若きハリウッドスターはボー・ララミー（コール・ハウザー）。ボーはその主演したアクション超大作の成功によって、一夜にしてスターダムへと駆けあがった。

そんな彼がある日、カメラのシャッター音に気付いたのは、愛妻のアビー（ロビン・タニー）とともに一人息子ザック（ブレイク・ブライアン）のサッカーの試合を見学していた時。なぜかカメラは息子に対して向けられ、何回もシャッター音が……。これに気付いたボーが抗議すると、一旦はすぐに「撤退」したものの、それは口先だけだった……。こりゃボーならずとも頭にくるのは当然。しかしそこで、カメラを取り上げただけならまだしも、レックスの挑発にのってボー

が「鉄拳制裁」を下したのはやはりマズかった……。それを待っていたかのように、バスの中からはたくさんのシャッター音が……。「ハメられた……」と思った時は、もう後の祭り……。

## 殴打事件の処理は？

若きハリウッドスターによる「カメラマン殴打事件」ともなれば、タブロイド紙のみならず、すべての二流三流週刊誌がそのネタに飛びつくのは当然。

ここで、レックスが要求したのは公式の謝罪と損害賠償だが、さてその請求額はHOW MUCH？ そしてポーはそれにどう対抗したのかも、よく考えてみよう。

## ここまでやるか……？

パパラッチ VS ポーの「仁義なき闘い」の第2幕は「お前の人生をメチャメチャにしてやる」と言い放ったレックスたちによる、ポーの車の襲撃……。パンフレットによると、「アメリカのロスは自動車社会で、タクシーがあまりいないから、スターでも自分で運転する人が多いため、パパラッチによってその車がターゲットにされることが多い」とのこと。そして現実にハリウッドスターたちの被害も続出……。

しかし、深夜に妻子を乗せてパーティーから帰宅している途中、パパラッチの車によって前後左右を取り囲まれ、フラッシュを浴びせられ続けたら、そりゃヤバイ……。そんなカーチェイスの中、現実にポーの車はある車と激突し、息子のザックは意識不明の重体に……。そこまでやるか、パパラッチ……。

## 目には目を……？

何事も日本（人）よりはっきりしているのがアメリカ（人）だから、パパラッチによって家族の平穏な生活が侵害されることに対して、ポーは断固反撃の決心を……。 「これぞアメリカ流の自己責任の貫徹」と誉めてやりたいところだが、本来はやはり、まず弁護士に相談して、ストーカー行為禁止の仮処分や、肖像権侵害による損害賠償請求などの法的手段をとるべき。現に、多くのハリウッドスターたちは、その手続をとることによって少しでもパパラッチの暴走を阻止しよ

うとしている。

しかし、この映画の主人公ポーは若いアクション俳優として一躍スターダムにのし上がっただけに、やるのがアクティブ……？　そこで彼が選択した、「目には目を」の路線とは……？

## キーパーソンはバートン刑事

この映画の前半は、パパラッチ VS ポーの「抗争劇」だが、後半は殺人事件をめぐるサスペンス映画の様相を呈してくる。それはなぜなら、ポーを襲ったパパラッチたちが、なぜか一人また一人と奇妙な死を遂げていくから……。

そこで登場するのが、バートン刑事（デニス・ファリーナ）。彼は百戦錬磨のベテラン刑事らしく、「目のつけどころがシャープ」などところは、某社のコマーシャルのとおり……。

陪審コンサルタントの姿を生々しく描いた『ニューオーリンズ・トライアル』（03年）（『シネマルーム4』226頁参照）に登場するハイテク機器もすごかったが、レックスたちパパラッチが使用しているカメラやビデオ装置などのハイテク機器も、ポーの家の中にひそかにセットする隠しカメラを含めて、そりゃすごいの。他方、もちろんポーもハリウッドスターだから、カメラを意識した演技はまさに本業。したがって、パパラッチ VS ポーの「血で血を洗う抗争（？）」はハイテク機器を駆使したものになることは避けられず、オッサン刑事であるバートンにその解明は一見無理かと思えたが……。後半はこのバートン刑事がキーパーソン。彼のシャープな目の付けどころに従って、この映画を鑑賞すればおおむね正解だろう……。

## これもメル・ギブソンの執念か……？

イエス・キリストの「受難」を生々しく描いたメル・ギブソン監督・脚本・製作の映画『パッション』（04年）は世界中に衝撃を与えた（『シネマルーム4』261頁参照）が、この映画製作にはメル・ギブソンの執念がひしひしと伝わっていた。それとは全く違う次元の問題ではあるものの、今回の映画製作にもパパラッチに対するメル・ギブソンの執念を感じ取ることができる。その執念とは、言

うまでもなく、パパラッチに対する嫌悪と憎しみ……？

ひょっとして彼は、若きアクション俳優ボーの行動に自分が若ければやりたい行動をダブらせているかも……？ 仮にそうだとすれば、私のメル・ギブソンに対する忠告は、くれぐれもそれは映画製作やストーリー構成だけの話にしておくように、ということ……。

## さて結末は……？

ボーの車を襲い、ボーのみならず、妻のアビーや息子のザックに大きな被害を与えたパパラッチたちへの「復讐」は一人また一人と成功していくが、それは果たして完全犯罪となるのだろうか？ それともバートン刑事はボーの逮捕に踏み切るのだろうか？ また、そのための証拠は十分なのだろうか……？ そんな緊張感を持って、映画後半が展開していくが、さてその結末は……？

これは、絶対誰にもしゃべるわけにはいかないもの。皆さん、それを楽しみに是非この映画を……。

2006(平成18)年4月11日記

ミニコラム

### 目には目を！ 歯には歯を！

パパラッチを許せないと思うのは有名人共通の思いだが、夫婦そろって有名人になると、パパラッチの数も倍増？ そこで一計を案じたのがアンジェリーナ・ジョリーとブラッド・ピットの「カップル」。ジョリーお気に入りのアフリカ南部のナミビアに滞在しての出産は注目を集め、パパラッチが集合した。政府は、外国人カメラマン4人に国外退去を勧告したが、ジョリーらのボディガードはパパラッチを探すため、警官を伴って滞在先の周囲

を封鎖し、令状なしで民家を搜索。さらに2人が訪れた海岸や桟橋など公の場所から一般人を締め出し、パパラッチに催涙スプレーを吹きつけた。ナミビア人権協会が出した「2人の滞在が、報道の自由や住民のプライバシーにとって悪夢となりつつあるのは大変残念」との声明はまさに正論！ しかし、それでもなおパパラッチの退散後5月に無事出産した女兒は、今後も彼らの標的とされることだろう。

2006(平成18)年8月16日記